

# スラッファの人事問題におけるケインズの力

松 本 有 一

- I 問題の所在
- II 1920年代の大学改革
- III 経済学部を増員要求
- IV ケインズからの要請とスラッファの応諾
- V スラッファの Lecturer 辞職と代替の職
- VI 結びにかえて

## I 問題の所在

ピエロ・スラッファ (Piero Sraffa) がケインズ (John Maynard Keynes) に初めて会ったのは1921年の8月ごろと考えられるが、その能力を買われたスラッファは、その後何度か論文発表の機会をケインズから与えられることになる。しかし理論家としてのスラッファに対するケインズの評価を決定的にしたのは *Economic Journal* (December 1926) に掲載された彼の論文「競争条件のもとでの収穫法則」(Sraffa (1926)) といってよいだろう。もちろんスラッファ自身の著作からいえば1925年のイタリア語論文「生産費と生産量の関係について」(Sraffa (1925)) がそのもとにあるが、ケインズやその他のケイムブリジ (Cambridge) の人たちからの評価を確実にしたのは1926年の英語論文であった。<sup>1)</sup>

1) 1925年のイタリア語論文が切っ掛けで *Economic Journal* にその要約を書くようケインズからスラッファに依頼があった経緯については Roncaglia (1975) 第1章, Kaldor (1986), pp. 621-622, (1989), p. 284 参照。

ケインズは1927年1月25日付でスラッファに宛てた手紙でこう書いている。  
 「12月号のあなたの論文はこちらでは大変な好評を得ています。この論文であ  
 なたが若手経済学者の第一線に立ったことに、私が話をした人たちは誰も賛意  
 を表します。ピグーはたいそう関心をもち、あなたのイタリア語論文を調べて  
 います。あなたの論文に照らしてみても自分の立場全体を再考しなければならない  
 といピグーが感じていることがわかって、あなたは興味深く思われることで  
 しょう。……」<sup>1)</sup>

1927年10月1日付でスラッファはケイムブリジ大学 (University of Cambridge) の University Lecturer in Economics に任命されることになるが、その切っ掛け（少なくともスラッファ側の要因）が1926年論文にあることは、先に引用したケインズの手紙の後段で、ケインズがスラッファに University Lecturer のオファの可能性を示唆していたことから疑うことはできない。

N. Kaldor は British Academy のためのスラッファ追悼文 (Obituary) でこのケインズの手紙を引用したあと、続けてつぎのように書いている。「外国人でありこの国の居住者でないピエロ・スラッファに lecturer としてケイムブリジに来るように、そしてそのために特別のポストを新設する (to create a special post for the purpose), と届けられた招聘状はまれな名誉ではあるが、今世紀において決して唯一のものではない」(Kaldor (1986), p. 625, (1989), p. 288). さらに続けて Kaldor は、Rutherford がロシアの物理学者 Kapitza を、G. H. Hardy がインドの独学の数学者 Ramanujan を Trinity College に招聘したことを、さらにはオランダの神学者である Erasmus が1511年にケイムブリジに招聘されたことを引き合いに出している。

1926年論文が高い評価を得、ケインズが以前からスラッファの能力を認めていたとしても、スラッファを招聘するために大学に新しいポスト、特別のポストを創らせるといような力がケインズにあったのだろうか。というより本当にそういうことをケインズはしたのであるだろうか。大学でのポストというのは一

1) この手紙は Kaldor (1986), pp. 624-625, (1989), pp. 287-288 に全文引用されている。

## スラッファの人事問題におけるケインズの力

個人の働きかけだけで設けられるものであろうか。<sup>1)</sup>

スラッファは1927年10月1日付で University Lecturer としてケイムブリジに來たが、この職を1931年9月30日付で辞職することになる。<sup>2)</sup> その時のことを Kaldor はこう書いている。「ピエロをいたく気にいったケインズは、彼をケイムブリジから離したくなく急いで二つの仕事を準備し、数年遅れてそれに第三の仕事を加えた。一つは Marshall Library の Librarian という新たに設けられた職 (newly created post) である。……第二は Royal Economic Society が企画した David Ricardo の著作集の編集者への任命である。第三は、研究生を全般的に担当する Assistant Director of Research という今一つの新しい職 (another new post) である」(Kaldor (1986), p.629, (1989), p.291-292)。<sup>3)</sup>

以上のような Kaldor の記述を読むと、ケインズはスラッファのために大学に Lecturer の職を特別に設けさせたうえ、辞職後は彼をケイムブリジに引き留めるために、経済学部 (Faculty of Economics and Politics, 以下では経済学部と表記する) に Marshall Librarian の職を新設し、<sup>4)</sup> 大学に Assistant Director of Research の職を新設させたということになる。ケインズが当時ケイムブリジでの経済学研究で指導的な役割をはたし、経済学部で発言力を持っていたであろうことは想像に難くない。スラッファがケイムブリジに University Lecturer として来る時、また辞職後の職に就く時、<sup>5)</sup> ケインズの力が与って

- 
- 1) 運営基金を寄贈して教授職などを創設するという例はある。ケイムブリジ大学で経済学の最初の Lectureship は1904年に Girdlers という会社の寄付で設けられ、A. C. Pigou がこの職に就いた。この職は Girdlers' Lecturer と呼ばれた。ケインズは1911年から1920年までこの職にあった。その次に経済学の University Lectureship が設けられたのは1911年であり、3番目は1924年であった。Historical Register (1917), p.127, Historical Register (1922), p.12, Historical Register (1932), p.31 参照。
  - 2) スラッファは最初の1年間は予定されていた講義をしなかった。英語での講義に自信がなかったことがその理由といわれている。
  - 3) この Kaldor の記述については松本 (1992) 第3節参照。
  - 4) Marshall Library の Librarian は経済学部の職で、大学の職になったのは1980年代になってからである。
  - 5) スラッファが University Lecturer 辞職後に就いたといわれている三つの職のうちの二つは Lecturer 在職中に就いたと思われる。松本 (1992) 参照。

いたであろうことを否定するものではないが、Kaldor のいうように簡単なもの、つまり一個人の力でできたというようなものであったのだろうか。

Kaldor が London School of Economics and Political Science (以下 LSE と略記) からケイムブリジに移ったのが1949年でケインズの死後であるが、戦時中は LSE とともにケイムブリジに疎開しケイムブリジで講義・研究をしていたこと、ケイムブリジに来てからは King's College の Fellow として、経済学部所属の University Lecturer, Reader そして Professor として勤め、スラッファと親しくしていたことなどから、彼の発言はそのまま受け取られ易い。しかし本当に Kaldor のいうとおりなのであるか。Kaldor はその時々<sup>1)</sup>の事情を適切に伝えているのだろうか。

ケイムブリジでのスラッファの経歴について書かれたものはいくつかあり、ほとんどはスラッファに近い人たちによるものだが、それらの間には必ずしも一致しない点が見られることがある。その主な理由としては、記述が伝聞もしくはケイムブリジでの言い伝えによっていて、必ずしも資料的な裏付けが取られていないことが考えられる<sup>1)</sup>。本稿の目的はこのような事情に鑑み、ケイムブリジにおけるスラッファの処遇、特に University Lecturer と Assistant Director of Research に任命された時の事情を、できる限りその当時の資料・記録に基づきながら明らかにしようというものである。

## II 1920年代の大学改革

スラッファが1927年10月1日付けでケイムブリジ大学の University Lecturer に任命されるまでにどのような経過があったのか。スラッファのついたポス

1) 典型的な例は、スラッファがいつからいつまで講義をしたのかということである。Kaldor (1986), (1989) では、1928-29, 1929-30の2年間しかスラッファは講義をしなかったかのよう<sup>1)</sup>に書かれている。記述内容の正確さが求められる経済学事典 *The New Palgrave* に掲載されている Eatwell and Panico (1987) では「1927年10月にスラッファはケイムブリジでの彼の講義を開始した」と書かれている。ケイムブリジでのスラッファの講義に関しては、松本 (1992) 第2節参照。

トは“a special post for the purpose”であったのかどうか、公式の記録に基づいてその経過を見ることが必要である。そのためには、1920年代のケイムブリジ大学の組織改革から考察を始めなければならない<sup>1)</sup>。

The Universities of Oxford and Cambridge Act in 1923 に基づいてケイムブリジ大学では大学組織その他の改革が行われた。それは1926年10月1日付で施行された大学の新しい諸規則 New Statutes によって形を整えることになる。大学の組織にさまざまな変更があったわけだが、われわれの当面の関心からいえば、教育主体の重点が College から University（より具体的には Faculty や Department）に移されたことがその一例としてあげることができよう<sup>2)</sup>。それまでは Faculty（学部）という組織体はなく、各 Tripos（各学問分野の学士試験）に対して Special Board という機関があり、そのもとで講義が組織され試験が実施されていた。経済学の場合でいえば、つまり Economics Tripos に関しては Special Board for Economics and Politics が講義を組織し、試験を実施していたのであった。Economics Tripos が新設され、講義が開始されたのは1903年10月であったが、その時点では経済学の University Lecturer はいなかった。Professor of Political Economy の職はすでにあり、以前は Special Board for Moral Science に属していたが、Special Board for Economics and Politics が設置されてからは後者に属することになった。1925年時点で経済学の University Lecturer は3名でしかなかった。

1926年10月1日付で施行されることになる新規則のもとの、University Lecturer と University Demonstrator のための定員配分（予算配分）——大学の諸改革、組織変更のために政府からそれなりの助成金があった——と最初

- 
- 1) この節の記述はおもに Historical Register (1932), pp. 1-9 とケイムブリジ大学の公報である *Cambridge University Reporter* (以下、Reporter と略記) の当時の号によっている。Reporter にはかなりのことが情報公開されている。例えば教員の年俸、教授職をはじめとする教員任命の人事委員会の構成員は公表されていて学生でも知ることができる。
  - 2) ケイムブリジでの University と College との関係は外部からはわかりにくい、組織としては独立した関係にあり、人事のルールはまったく別である。Historical Register (1917), pp. 11-13 参照。

の任命のために全学的な委員会、すなわち Initial Appointments Committee が構成された。<sup>1)</sup> Inicial Appointments Committee から1926年5月14日付で提出された第1回目の報告の<sup>2)</sup>時点で、経済学部の場合でいえば10名の University Lecturer の任命が決まっていた年俸基準なども示されていたが、各学部への予算配分案は未決定であり、その案は1926年7月21日付の第2回目の報告で示された。<sup>3)</sup>

1925年の段階での University の職としての経済学のいわば専任教員は、Professor of Political Economy のほかは3名の University Lecturer であった。歴史や政治などの関連科目を別にして、その他の経済学の講義担当者の多くは College のみの所属であった（必ずしも Fellow であるとは限らない）。1926年10月から大学に学部（Faculty）が設置され、経済学部所属の University Lecturer は10名になった。<sup>4)</sup> また、これまで General Board の権限であっ

- 1) この委員会の構成は1925年12月11日の評議員会（the Senate）で承認され、Vice-Chancellor をはじめとする10名が委員となった。委員には College の長や Deputy Vice-Chancellor が含まれていたが、J. M. ケインズは委員の一人であった。Reporter (15 DECEMBER 1925), p. 429 参照。委員会名は公式には単に Appointments Committee であるが、Inicial Appointments Committee と呼ばれることがあり、この委員会による任命は Inicial Appointments と呼ばれる。
- 2) "Report of the Appointments Committee, 14 May 1926" は Reporter (18 MAY 1926) に公表されている。すでに決定された University Lecturer と University Demonstrator の各学部ごとの名簿、年俸基準などが示されている。
- 3) "Second Report of the Appointments Committee, 21 July 1926" は Reporter (11 AUGUST 1926) に公表されている。Initial Appointments 対象者個々人の給与一覧が学部別に掲載され、学部ごとの助成金配分表が掲載されている。全体としては183名の University Lecturer と17名の University Demonstrator が新規則のもとでの職に就いた。
- 4) University Lecturer は3名から10名に増えたが、このことは経済学の実質的な講義担当者が増えたことを意味しない。というのは増員された人たちは University Lecturer という職にはなかったが、それ以前から経済学の講義を担当していたからである。1925-26学年度に約40あった講義科目数がそれによって増えたわけでもない。

これまで General Board of Studies の権限であった University Lecturer と University Demonstrator の任命は、各学部設置された Appointments Committee の権限となった。General Board of Studies は名称が General Board of Faculties となるが、General Board と略称されている。日本の大学の大学評議会に相当する機関と考えればよいだろう。また1926年までは Faculty（学部）という組織はなく Faculty Board に相当する組織は Special Board と呼ばれていた。

た University Lecturer の任命は、新規則が施行されてからのちは学部ごとの Appointments Committee で決定されることになる。<sup>1)</sup>

経済学部では Initial Appointments Committee に対して13名の Lectureship を要求していたが、<sup>2)</sup> Initial Appointments では10名が任命された。しかしなお財政的には増員は可能であった。スラッファの University Lecturer 就任問題はこのような背景で考えられなければならない。

### Ⅲ 経済学部の増員要求

経済学担当の University Lecturer はこれまでの3名から1926年10月1日付で10名になったが財政的にはなお増員可能であり、また Initial Appointments Committee に対し最小限13名の University Lecturer を要望していたという経緯もあったのか、経済学部は2名の増員を General Board に要望し、これが認められることになる。<sup>3)</sup> 1名は Lecturer in Economics でもう1名は Lecturer in Economic History であった。2名の増員に関し、年俸および College の Fellow でない場合の手当は、大学から新たな予算を得ることなく、経済学部の財源でまかなえることが、経済学部からの要望書に明記されている。

経済学部で2名の Lecturer を採用するとの公示が1927年4月28日付で Vice-Chancellor 名でなされ *Reporter* (3 MAY 1927) に公表されている。年俸は £200 で £300 まで上がることに、College の Fellow でない場合は £150 の手

- 1) 教授職 (Professorship) に関しては特別の場合を別にして各教授職に対し選任委員会 (Board of Electors to Professorship) が常設されている。Readership は必要に応じて関係学部の要請を受け、General Board で認められればその設置が提案されることになる。空席になれば特に決定がなされない限り消滅する。常に一定の定員があるわけではない。誰かを Reader にするということはその候補者のために Readership を設置するということである。
- 2) "Report of the General Board on the establishment of two additional University Lectureships in the Faculty of Economics and Politics, 23 February 1927", *Reporter* (1 MARCH 1927), p. 791 に Special Board for Economics and Politics から Initial Appointments Committee に13名を要望した件が言及されている。
- 3) 経済学部の要望を受けた General Board からの報告は前注の Report である。経済学部で2つの University Lectureship を増設するという提案は1927年4月22日の Regent House で承認された。 *Reporter* (26 APRIL 1927), p. 1009 参照。

当があること、最初は1927年10月1日から3年の任期であることが明記されている。志願者は5月25日までに応募書類を Vice-Chancellor 宛に提出するように求められていた。どの学部の場合でも Appointments Committee の長 (Chairman) は Vice-Chancellor またはその代理が務めることになっている。この時の経済学部の Appointments Committee のメンバーは、Vice-Chancellor のほか経済学部の Faculty Board の Chairman として Prof. A. C. Pigou, Faculty Board から選ばれたその3名のメンバーでケインズ, E. A. Benians, L. Alston, さらに General Board によって任命された2名で H. A. Hollond と D. H. Robertson の合計7名であった。<sup>1)</sup>

#### IV ケインズからの要請とスラッファの応諾

ケインズは1927年1月25日付の手紙でスラッファに対し、*Economic Journal* (Dec. 1926) 掲載論文の評価にふれたあと、非公式であることを断っているが、ケイムブリジ大学の University Lectureship のオファがあった場合それを考えてほしいと書いている。これは第I節で紹介した Kaldor 論文で全文引用されている手紙である。ケインズの手紙の文面を見るかぎりでは Kaldor のような理解もやむを得ないかもしれない。というのはケインズはかなり都合のよいように書いているように思われるからである。例えば、在職期間 (the length of tenure) はスラッファの考えしだい、一年間で帰国してもよいし、望むならもっと長くいてもよいとか、スラッファが受諾すると思われるのなら大学はスラッファのために lectureship の新設 (creating a new lectureship) を考慮すると思うとかである。

1) Vice-Chancellor を別にした6名のメンバーのうち、Pigou, Alston, Robertson そしてケインズは経済学専攻である。Benians は Faculty of History 所属の University Lecturer で Faculty Board of History の Chairman でもあったが、経済学部でイギリス経済史の講義をし、経済学部の Faculty Board のメンバーでもあった。Hollond は Faculty of Law 所属の Reader in English Law で Faculty Board of Law のメンバーでもあった。1927年10月1日付で採用する2名の University Lecturer の人事が経済学部の Appointments Committee の最初の仕事であった。



## スラッファの人事問題におけるケインズの力

手紙の日付の時点は公式に経済学部で University Lecturer の増員が認められる前であるが、経済学部では General Board に対し増員要求をすることが決まっていたのかもしれないし、13名の University Lecturer を要求していた経済学部としては、候補者が誰であるかを別にしても、増員要求は既定の方針であったのかもしれない。

ケインズの手紙を読むとき注意しなければならないことがある。それはケイムブリジ大学での人事の進めかたで（ここでは経済学部での University Lecturer の採用人事に関してだけ考える）、その正確なところは外部からはわかりにくい、つぎのように考えることはできるであろう。Faculty で Lecturer を増員したいとき（つまり new Lectureship を create したいとき）、Faculty Board から General Board に対して増員要求をするが、この時候補者が決まっているかどうか別に、特定の候補者を採用するために増員するという形にはならない。増員が認められた場合 Vice-Chancellor 名で公に募集が行われる。少なくとも形は公募である。スラッファの場合も公募に応募したのであった。いずれにしても増員が認められるということは、その職が新設される（newly create）ということである。スラッファの人事があったとき、もう一人経済史での人事があり D. L. Burn が採用されることになるが、スラッファのために Lectureship が新設されたというならば、経済史の Burn のためにも Lectureship が新設されたといわなければならないであろう。

ケインズの誘いに対して、スラッファはカリアリ（Cagliari）からの1927年2月6日付の手紙で、申し出を喜んで受けたい旨の返事をして<sup>1)</sup>いる。

スラッファは1926年3月からカリアリ大学にいたが、ケインズからの誘いがあったころジェノヴァ（Genova）大学の教授職の話もあったようである。Kaldor が引用している手紙にそのことが出てくる。スラッファはケインズへの手紙の中で、ジェノヴァの教授職を得ても1～2年イタリアを離れることに

1) スラッファの返事は、Kaldor (1986), pp. 625-626, (1989), p. 288-289 に部分的な引用を含めて内容が紹介されている。

困難はないといっている。<sup>1)</sup> 実際スラッファはカリアリ大学を休職してケイムブリジに行ったわけで、その意味では彼は当初はケイムブリジに長居するつもりはなかったと考えてよいだろう。<sup>2)</sup>

1927年5月4日付の手紙でケインズはスラッファに University Lecturer の公募の件を知らせたようで、スラッファは1927年5月9日付で返事を書いてい<sup>3)</sup>る。その中でスラッファは Vice-Chancellor 宛の応募書類の書き方がわからないので、簡単な履歴書とともに署名をした白紙用紙を送るので、そこにタイプをして応募書類を作ってくれるよう依頼している。1927年5月9日付の応募書類のタイプ打ちカーボンコピーとスラッファの履歴書のタイプ打ちカーボンコピーとが Keynes Papers (King's College Library 所蔵) に保存されている。

2名の University Lecturer の採用は形式的には公募の形をとっているが、残されているケインズのスラッファ宛の手紙（正確にはそのカーボンコピー）を読むかぎり、競争相手がいたようには思われない。Kaldor は議事録に基づいて1927年5月30日の Appointments Committee で全員一致でスラッファの人事が決定されたことを報告している。ケインズは1927年5月31日付の手紙で「昨日」スラッファの University Lecturer in Economics への任命が決定したことを知らせている。ケインズからの手紙の内容は Kaldor 論文で紹介されている。<sup>4)</sup> *Reporter* (7 JUNE 1927) に経済学部での2名の University Lecturer の採用決定が公表されている。全文を引用しておく。

University Lecturers in Economics and Economic History appointed

SIDNEY SUSSEX COLLEGE LODGE. 31 May 1927.

The Appointments Committee of the Faculty of Economics and Politics have

- 
- 1) 1927年3月10日付のスラッファからケインズへの手紙 (Keynes Papers, King's College Library, Cambridge 所蔵)。
  - 2) 1939年終わりか1940年初め頃に書かれたと思われるスラッファの自筆履歴書には、1927年にカリアリ大学から3年間の賜暇を得たが、ケイムブリジで終身任命となったので1930年に辞職したとある (Keynes Papers, King's College Library 所蔵)。
  - 3) Keynes Papers, King's College Library 所蔵。
  - 4) Kaldor (1986), p. 626, (1989), p. 289 参照。

## スラッファの人事問題におけるケインズの力

appointed Dr PIERO SRAFFA, Professor of Political Economy in the Royal University of Cagliari, University Lecturer in Economics for three years from 1 October 1927; and D. L. BURN, B. A., of Christ's College, University Lecturer in Economic History for three years from 1 October 1927.

G. A. WEEKES, *Vice-Chancellor*.

これによって経済学部では1927年10月から University Lecturer は2名増えることになったが、実際には1名 (F. Lavington) が1927年7月に亡くなったため、実質は1名の増加で11名となった。

## V スラッファの Lecturer 辞職と代替の職

スラッファは1927年10月1日付で3年の任期で University Lecturer in Economics の職に就いた<sup>1)</sup>。そして1930年3月に、1930年10月1日付での再任が決定され、任期は停年までとなる<sup>2)</sup>。ところがスラッファは University Lecturer の辞職を、おそらく再任決定後から1930-31学年度が始まって間もないころまでの間に、Faculty Board の Secretary である Austin Robinson に申し出ることになる。スラッファの辞職願いは認められ、彼は1931年9月30日付で University Lecturer in Economics を辞することになった<sup>3)</sup>。

スラッファは University Lecturer を辞めた後もケイムブリジにとどまったが、Kaldor による経過説明は第I節で紹介したとおりである。簡単に繰り返せば、ケインズはスラッファのために、①Marshall Librarian, ②Ricardo 著作集の編集者, ③Assistant Director of Research というような職を用意したということである。

このうち①と②については、スラッファが University Lecturer の辞職を表

1) ケイムブリジ大学でのスラッファの最初の年俸は、イタリアでの経験が認められたため基本給が£250 (そうでなければ£200) で、College の Fellow でないための手当が£150 で合計£400 であった。Reporter (8 NOVEMBER 1927), p. 246.

2) 再任決定は Reporter (21 MARCH 1930), p. 818 に公表されている。

3) Robinson (1977), p. 29. 辞職は Reporter (24 JULY 1932), p. 1383 に公表されている。

明してからのちに用意されたものであったという点に筆者は疑問を持っているが、それに関しては松本（1992）の第3節を参照していただきたい。ここでは Assistant Director of Research の件に限定して考察する。

ケイムブリジ大学での Assistant Director of Research の肩書きは、いくつかの科学系部門の長によって、限定された研究領域について、研究の監督指導のための代理者に対し1924年にあてがわれたのが最初であった。Assistant Director of Research は Grace 3 of 18 June 1932 によって事務職（University Administrative Office）として認知され、Grace 2 of 17 November 1934 によってようやく大学の教育職（University Teaching Office）として認知されるにいたった。1935年までに Assistant Director of Research の職に就いた人たちの分野をみれば、自然科学もしくは心理学のような実験をとまなう研究分野であった。<sup>1)</sup>

そのような職である Assistant Director of Research になぜスラッファは就くことになったのであろうか。その事情は1935年2月27日付の大学教員増員に関する General Board のリポート “Report of the General Board on the establishment of certain additional University Teaching Offices” (*Reporter* (12 MARCH 1935), p. 725) から大体わかるように思われる。リポートの関連する部分を要約すればつぎのようである。

General Board は教員の増員に関してすべての Faculty Board に対し、1934年の Lent Term (1月-3月の学期) までに要望を出すよう依頼した。経済学部はこれに対し1933年11月に General Board に対してつぎのように伝えた。

経済学部は近年増加している研究生 (Research Student) の活動のために、より適切な準備をするという問題を考えてきた。研究生に対しインフォーマルな形で研究を援助し、特別の指導をするために教員が必要ということになった。それは Assistant Director of Research かまたは Lecturer によって可能になるが、その者は公式の講義をする必要はないということで、Faculty

1) このパラグラフの記述は Historical Register (1942), p. 29 による。

## スラッファの人事問題におけるケインズの力

Board は Assistant Director of Research を選択した。Faculty Board はこのポストに P. スラッファを任命することを提案する。Faculty Board は、形式ばらない教育指導をするのにスラッファは特に適任だと考えている。彼のイタリアでの教授職の経験やヨーロッパの諸学派に関する幅広い知識は特に有用である。スラッファは1934—35学年度ロックフェラー財団 (Rockefeller Foundation) の Fellowship を得ているので、Faculty Board は1935年10月1日までこの職が設けられることは要望しない。

General Board は経済学部はこの要望に同意し、文系部門での通常のタイプとは異なるが、経済学の特殊な状況に鑑みこのポストの設置を提案するという結論に至った。同時にこのポストの保持者は Marshall Library の Librarian を務めることが、それが適当であるとして、提案されている。そして General Board は、このポストが設置された時にはスラッファを1935年10月1日から5年間の任期で任命するが、以降の任命、再任は経済学部の Appointments Committee で行うこと、任期は Faculty Board との協議の上で General Board が決定すべきものであるという意見が表明されている。

以上が1935年2月27日付のレポートの経済学部に関する部分の要旨である。

このレポートの内容は1935年5月17日に Regent House の承認を得て (Grace 5 of 17 May 1935, *Reporter* (21 MAY 1935), p. 1004), General Board はそれに基づき1935年6月15日に他の人事とともに、スラッファを1935年10月1日から5年の任期で Assistant Director of Research in Economics に任命することを決定した。これは *Reporter* (18 JUNE 1935) に公表されている。

Austin Robinson は、スラッファが Lecturer を辞職した「少し後に、われわれ (we) は彼を Assistant Director of Research にするよう取り計らった」 (Robinson (1977), p. 29) と書いているが、上述のような経過を考えれば、経済学部全体で教員増員のチャンスをつかまえてスラッファを University の職に復帰させたと見るのが妥当ではないだろうか。

スラッファは Marshall Librarian として経済学部にいたが、この職は Uni-

versity の職ではなく、King's College のメンバーであるとはいえ、Fellow ではなく（スラッファが Lecturer を辞めた時点では R. F. Kahn は King's College の Fellow に選任されていて、King's College には A. C. Pigou, G. F. Shove そしてケインズと、経済学専攻の Fellow は 4 人もいた）、彼のケイムブリジでの身分は必ずしも安定していなかったように思われる。ロックフェラー財団の Fellowship に応募したのはその現れではないだろうか。ケイムブリジで安定した身分と収入が得られていたならば、アメリカで研究することになるロックフェラー財団の Fellowship に応募する必要はなかったであろう<sup>2)</sup>。

Assistant Director of Research の職務内容は学部によって異なっていて、その取扱いには難しい問題があったようである。ケイムブリジ大学の現行の規則 Statutes にも Assistant Director of Research の名称は付表でしか出てこない (Statutes (1985))。スラッファに関することでは次のようなことがあった。1940年の再任のころのことである。

1940年1月17日付で General Board から Assistant Director of Research に関する規程についてのレポートが出された。そこには任期を5年を限度とする<sup>3)</sup>ということは変えないが、一時的なものとして、再任の場合を含めて任期を1年限りとするという但し書が盛り込まれていた（再任の場合は1年ごとに任命される）。

- 1) King's College (1984) 掲載のスラッファの Obituary（無署名）によれば、「1930年のイースターに彼はコレッジのメンバーとして公式に登録された (enrolled)」(p. 75) と書かれている。King's College (1963) では1930年の Easter Term (4月-6月の学期) に登録 (entry) されたことになっている。スラッファは1930年6月にケイムブリジ大学から M. A. の学位を授与されている。これは大学またはコレッジに職を持っている者に対し、他大学で学位を得ているか、その資格があると認められた場合に授与されるという規定によるものである (*Reporter* (17 JUNE 1930), Statutes (1928), pp. 13-14)。筆者はスラッファの M. A. 取得と King's College のメンバー登録とが関係あるのではないかと見ているが、明確な証拠はない。
- 2) スラッファがアメリカでなくイタリアで研究できるよう、ケインズがロックフェラー財団に働きかけたことを示す手紙のコピーが Keynes Papers に残されている。スラッファは実際にはアメリカへは行かなかったようである。
- 3) "Report of the General Board on regulations for the holders of the office of Assistant Director of Research, 17 January 1940", *Reporter* (30 JANUARY 1940), pp. 539-541.

## スラッファの人事問題におけるケインズの力

経済学部 Faculty Board ではそれ以前に、間もなく任期満了をむかえるスラッファの Assistant Director of Research 再任の際の任期をどうするかということが議論されていたようで、任期を1年限りとするという General Board に再考を求めた。ケインズは Faculty Board を代表して（おそらくケインズは Faculty Board の Chairman になっていたのだろう）、<sup>1)</sup> 2度にわたって Secretary General of the Faculties の J. T. Saunders 宛に書簡を送っている。これに対し J. T. Saunders は、その取扱いを1940年2月13日開催の Regent House での審議の後とすると、ケインズ宛に回答している。<sup>2)</sup>

ケインズは Faculty Board of Economics and Politics を代表して2月13日の Regent House での審議で意見を述べた。その内容は *Reporter* (20 FEBRUARY 1940), pp. 583-584 に掲載されている。そこにはスラッファの名前は直接出てこないが、内容からスラッファとわかる人物の例をあげて説明し、Assistant Director of Research の任期に関する条項の修正案を提案している。問題の根本には、職務内容、給与、職歴がさまざまに異なる者たちが、職名だけが同じというところにあるようだが、スラッファの場合かつて University Lecturer として停年までの任期を得ていて、Marshall Librarian, Assistant Director of Research として1927年以来（1年間をのぞいて）勤めてきた等々の理由から、1年ごとの継続というのは相応しくないというのがその理由である。ケインズの修正案の骨子は、General Board は Faculty Board と協議のうえ任期を1年のみとすることができる（つまり1年の場合もあれば5年の場合もある）、というものであった。

1) 筆者はケインズが Faculty Board の Chairman になった正確な日付けを確認できなかったが、*Reporter* (5 JANUARY 1940) で Pigou となっていた Faculty Board of Economics and Politics の Chairman は *Reporter* (19 APRIL 1940) ではケインズに代わっている。*Reporter* (6 JANUARY 1941) ではまた Pigou に戻っている。Assistant Director of Research の件にしても、マン島に収容された経済学部の2名のメンバーの件にしても（松本（1992）第5節参照）、やっかいな問題を処理するためにケインズが Faculty Board の Chairman に就いた観がないでもない。

2) King's College Library 所蔵の Keynes Papers に関連の文書が保存されている。

結局 General Board は問題の但し書を取り下げ、給与に関する条項に新たに但し書をつけた修正案を提出し、それが認められることになった。<sup>1)</sup> 修正案に対しては意見は出されず、Grace 2 of 10 May 1940 として承認されることになった。<sup>2)</sup> 新たな但し書は、本来の条項では College の Fellow であるか Fellow になった Assistant Director of Research の給与は減額されるとなっているが、すでに Assistant Director of Research になっているものが Fellow であるか Fellow になるかしても、中断なく Assistant Director of Research を務めている場合には減額されないという、スラッファにとってはむしろ有利なものであった。

Assistant Director of Research の任期は 5 年が限度であったため、スラッファはこの後 5 年ごとに経済学部 of Appointments Committee によって再任の手続きを受けることになる。最後の任期は 1960 年 10 月 1 日から 5 年間（ちょうど停年の時まで）であったが、その任期途中の 1963 年 10 月 1 日付でスラッファは Reader in Economics に任命されることになる。

## VI 結びにかえて

以上のように見てくると、ケイムブリジでのスラッファの人事問題に対するケインズの関わり、というよりむしろ積極的な働きかけがあったことを否定できないが、ケインズ個人の力ですべてがなし遂げられたのではないこともわかる。客観的な条件があったうえで、ケインズの働きかけが功を奏したというのが適切ではなかろうか。

経済学部の人事に関して、すべてがケインズの思いどおりになったわけではない例をあげておこう。それは Eduard Rosenbaum に関する件である。1935 年にケイムブリジ大学の大学図書館 (University Library) が新築されたが、

1) 修正案 (Amending Report of the General Board on regulations for Assistant Director of Research, 6 March 1940) は *Reporter* (23 APRIL 1940), p. 784 に掲載されている。

2) *Reporter* (7 MAY 1940), p. 834, *Reporter* (14 MAY 1940), p. 877 参照。



## スラッファの人事問題におけるケインズの力

その前提にたって Marshall Library の移転，拡充が予定されていた。ケインズは，ドイツのハンブルク（Hamburg）の Commerzbibliothek にいた E. Rosenbaum の経験と能力を買い，彼を Marshall Library に迎えようとしたが，経済学部内の反対にあい結局は成功しなかった。<sup>1)</sup>

スラッファは1931年9月30日をもって University Lecturer を辞めた後もケイムブリジに留まり，引き続き Marshall Librarian を務め，Ricardo 著作集の編集作業を続けた。1935年に Assistant Director of Research として University の職に復帰し，1963年には Reader in Economics になった。また，1939年からは Trinity College の Fellow でもあった。この間，例外的に講義を担当したこともあったが，<sup>2)</sup> 一般にはスラッファは研究と，総索引を別にすれば1955年に完結した Ricardo 著作集の編集に専心していたと考えられているようである。

いわゆる「行政」面でスラッファが就いた役職に関しては，ケイムブリジの人たちにとっては言わずもがなのことであるのかもしれない。Pasinetti はスラッファが Faculty Board のメンバーであったことを伝えているが，<sup>3)</sup> それ以外はほとんど伝えられていないように思われる。最後に，すでに言及した以外でスラッファが就いたケムブリジ大学および経済学部での役職について紹介して，この稿を閉じることにする。

スラッファは1931，1940，1941，1942，1943，1944の各年に Economics Tripos (Part I または Part II) の Examiner (試験官) を務めた。全員が毎年 Examiner を務めるわけではないが，学部所属の講義担当者としては当然分担しなければならない仕事と考えられる。しかしスラッファは1940，1944年は講義を担当していなかった。スラッファは1935年10月から1966年1月まで，若干の期間（1957-58年，1963-64年）を除いて，経済学部の Degree Committee の

1) Keynes Papers に関連文書が保管されている。松本（1992）第5節も参照のこと。

2) 松本（1992）第2節参照。

3) Pasinetti（1988）。

メンバーであり、在任中のほとんどで Secretary を務めた。これは彼が Assistant Director of Research の職にあったことと関係があるように思われる。Secretary は委員会の実務上の責任者で、対外的な窓口である。またスラッファは1939年から1956年まで経済学部 Faculty Board のメンバーを務めた。彼がマン島 (Isle of Man) に収容されていた時も名簿から彼の名前は消えていない。さらにスラッファは1940年から1967年まで Professor of Political Economy の選出委員会 (Board of Electors, 8 人で構成されている) のメンバーの一人でもあった。<sup>1)</sup> (1992. 2. 13.)

### 参考文献

- Eatwell, J. and C. Panico (1987), "Sraffa, Piero (1898-1983)", *The New Palgrave, A Dictionary of Economics*, Vol. 4, Macmillan.
- Historical Register (1917), *The Historical Register of the University of Cambridge being a supplement to the Calendar with a record of university offices honours and distinctions to the year 1910*, edited by J. R. Tanner, Cambridge at the University Press.
- Historical Register (1922), *The Historical Register of the University of Cambridge Supplement, 1911-20*, Cambridge at the University Press.
- Historical Register (1932), *The Historical Register of the University of Cambridge Supplement, 1921-30*, Cambridge at the University Press.
- Historical Register (1942), *The Historical Register of the University of Cambridge Supplement, 1931-40*, Cambridge at the University Press.
- Kaldor, N. (1986), "PIERO SRAFFA 1898-1983", *Proceedings of the British Academy*, Vol. LXXI, Oxford University Press.
- Kaldor, N. (1989), "PIERO SRAFFA (1898-1983)", *Further Essays on Economic Theory and Policy, Collected Economic Essays*, Vol. 9, Duckworth (reprint of Kaldor (1986)).
- King's College (1963), *A Register of Admissions to King's College Cambridge 1919-1958*, compiled by R. H. Bulmer and L. P. Wilkinson.
- King's College (1984), *Annual Report*, October, Cambridge.
- 松本有一 (1992), 「ケイムブリジでのスラッファ——J-P. Potier『ピエロ・スラッファ——異端の経済学者 (1898-1983) を読んで』『経済学論究』第46巻第1号, 4月.
- Pasinetti, L. L. (1988), 岡本義行訳「ピエロ・スラッファの思い出」『経済セミナー』4月号.

1) Reporter には毎学期のはじめに大学の役職の一覧が掲載されている。

スラッファの人事問題におけるケインズの力

- Porta, P. L. (1984), "Piero Sraffa (1898-1983)", *Rivista Internazionale di Scienze Economiche e Commerciali*, Anno. XXXI, N. 1, Gennaio.
- Reporter ( — ), *Cambridge University Reporter*, Cambridge University Press.
- Robinson, A. (1977), "Keynes and his Cambridge Colleagues", in D. Patinkin and J. C. Leith (eds.), *Keynes, Cambridge and The General Theory*, The Macmillan Press.
- Roncaglia, A. (1975), *Sraffa e la teoria dei prezzi*, Editori Laterza (渡会勝義訳『スラッファと経済学の革新』日本経済新聞社, 1977年, 英語訳 *Sraffa and the Theory of Prices*, John Wiley & Sons, 1978).
- Sraffa, P. (1925), "Sulle relationi fra costo e quantità prodotta", *Annali di Economia*, Vol. II, N. 1.
- Sraffa, P. (1926), "The Laws of Returns under Competitive Conditions", *Economic Journal*, Vol. XXXVI, December.
- Statutes (1928), *Statutes of the University of Cambridge and Passages from Actes of Parliament Relating to the University*, Edited by the Registry of the University, Cambridge at the University Press.
- Statutes (1985), *Statutes of the University of Cambridge and Passages from Actes of Parliament Relating to the University*, published by Authority, Cambridge University Press.